マンスリートピックス

1. すすむ過疎
2. 下水道部の誕生
3. ステッセルと乃木将軍

1. 狭い日本の国土の中に過密と過疎が隣り合って存在している。まことに不思議な現象である。ところで，一方の大都市周辺の過密問題については，ずいぶん以前から取り上げられ，成否は別としてさまざまの対策が打ち出されているのに，他方の過疎問題については取り上げられたのも遅く，かつ対策もあまり研究されていないように思われる。

自治省では昨春，過疎地域対策緊急措置法によって775市町村を過疎市町村に指定したが，さらに昨年の国勢調査の結果に基づいて新たに274市町村を4月30日付で追加決定した。これで，全国市町村の32.2%が過疎の折紙をつけられたことになる。この指定された地域の面積は全国土の41.5%人口にして8.5%だそうで，過疎市町村を持たないのはわずかに大阪・神奈川の2府県に過ぎない。狭い国土の中で，一方では目白押しだというのに，反対側はがらあきとは，まことにもったいない話である。何とか人口の流出を食いとめ，狭い国土を有効に利用する方策はないか？これは，もちろん自治体単位では解決のつかない問題であり，国家的な見地からの対策が待たれる。また，この問題は非常に急を要する問題である。こつこつ研究して何十年かたってから立派な「過疎対策」をつくりあげてみても，そのころ過疎地域に住民が一人も住んでいなかった，というのではお話にならない。過密と過疎は現代をのせて走っている車の両輪である。しかし，過密という片側の車輪を回せば過疎のほうもまわるだろう，という考え方は甘すぎるのではないだろうか。両輪とも同じ速度でフル回転してもらわねばならない。 [S]

2. さる5月10日，建設省都市局に下水道企画課と下水道事業課の2課の体制を有する下水道部が誕生し，初代の部長には，長いこと下水道行政や技術の推進の第一線で活躍してこられた久保赳氏が就任された。この下水道部の誕生は，役所の機構いじりの問題としてではなく，わが国の下水道事業，都市土木事業にとって，一つのエポックメーキングな出来事と筆者には思われる。

わが国の下水道事業は，明治10年代から多くの土木技術者によって支えられ，推進されてきたとはいえ，道路・港湾・鉄道等に比べれば，立ち遅れは明らかであり，つい最近まで地味な存在であったといえる。道路局・港湾局はあっても，いままで下水道課だけですましてきたことがその端的な表われといえよう。それが，昨今の公害問題の高まりのなかで下水道法の大幅な改正がなされ，水質の環境基準を達成するための水質保全計画として「流域別下水道整備総合計画」の策定や，公共下水道に流入する汚水は，すべて終末処理場で処理する規定等が盛り込まれた。本年3月には，2兆6000億円の投資をうらづける下水道整備緊急措置法も可決成立した。このような一連の動きをながめてみると，下水道事業がようやく都市政策の本舞台に登場してきた感が強く，下水道部の今後のハッスルが期待される。 [C]

3. 戦後25年，わが国に関しては実に長い平和が続いているといえる。どんな戦争も悲惨であることにかわりはないにしても，たとえば日露戦争終結時の乃木将軍とステッセル将軍が仲良く（？）写真に収まっているのをみれば，いままでの戦争は，まだ人間の最後のキズナが切れていなかったと思える。

ところで年間中都市の人口ほどの負傷者が生まれるいわゆる“交通戦争”がある。また人間が機能を求めて集中した都市の空気や水の汚染等の自然破壊の戦争がある。2つとも次第に深く浸透して，ほんものの戦争以上に悲惨になることを恐れねばなるまい。ここで考えねばならないことは，2つの戦争ともに，われわれ土木技術者に深く関係するものであるということである。さらに単なる土木技術を超えたものであることも……。

さて戦争といえば，昔から男のものであった。そのため，戦いの技術と腕を磨くことが男たる武士のつとめであった。戦後強くなったのは靴下と女といわれたが，この重大な時期に土木技術は男にならねばなるまい。

縦横無尽にからみあった複雑な利害関係の今日の世の中で，ステッセルと乃木将軍のごとく“人間連帯”の終結を目ざす“技術”は，まさに男の領分だからである。 [J]